

懐かしい北朝鮮

愛媛県 大政 恭子

朝鮮咸鏡南道元山府緑町三十三番地、ここが私たち兄弟姉妹の生まれ故郷です。今は訪れることは叶わないけれど、夢にでも訪ねてみたい「ふるさと」なのです。

私の実家である泉川家は、明治時代に祖父仁太郎が朝鮮郵船に在籍し、日本海沿岸の伏木、敦賀、舞鶴などの港と下関、釜山、元山、清津、そしてウラジオストックなどを結ぶ航路の船長をして働いていた関係で、船を下りてからも港湾関係の仕事に就いたので、生活の根拠地を元山に定めて、祖母と父克己の三人で住んでいました。

父は明治三十四(一九〇二)年に大阪で生まれ、大正七(一九一八)年釜山中学校の第一回卒業生となり、次いで大阪高等工業学校応用化学科へ進学しました。卒業後は、大阪四天王寺女学校の教

師として勤務した後、両親の住む元山へ戻り、創立もない元山公立中学校へ勤務しました。大正から昭和の始めの若い中学教師の時代には、登山、スキー、スケート、テニス、水泳、ヨット、ボートなどスポーツ三昧で、中学校の若者たちと青春を楽しんでいたようでしたが、昭和十二年からは、元山公立高等女学校に移り、相変わらず若き教師として活動していました。

母栄子は、祖父市岡義之助が外務省書記官として、京城(ソウル)の日本公使館に勤務していた関係から、明治三十七年、日露戦争の最中に京城で生まれ、大正十年京城公立高等女学校を卒業し、付設の女子教員養成所へ進学。卒業後は、長兄が東洋拓殖銀行元山支店に勤務していた関係で、元山普通学校(朝鮮人の子女の学校)の教師をしていたときに、父とテニスを通じて知り合ったそうです。

今、元山の話題を中心とした、温突談話室のホームページを読んで、懐かしい日々をしのいでい

ます。六十余年前には、こんなことができる世の中がくるなんて夢にも考えられないことでした。

昭和二十（一九四五）年八月十五日、正午の放送によって、私たちの生活は一変しました。それまでは親しい朝鮮の人たちから、「日本は危ない」ということは聞かされていたようですが、十歳の私たち子供は、「ほしがりません勝つまでは」の合言葉を信じきって生活していました。

当時は、父の転勤で道庁所在地の咸興を経て、興南で生活をしていました。興南は北朝鮮随一の工業地帯でした。豊富に開発された水力発電の電気による炊飯、社宅一帯に地下パイプを通して送られてくる蒸気によるスチーム暖房、お風呂もその蒸気で沸かすことができ、トイレも水洗便所という快適な文化生活でした。学校の校舎も煉瓦造りで、スチーム暖房、水洗便所、お掃除でお湯も使える環境です。

学校生活は小学校四年生とはいえ、勤労奉仕として、近くの火薬工場へ行つての箱貼り作業、お

昼は豆カスの入ったお握りでした。学校の運動場での野菜作り、そこへの肥料運び（浄化槽からの汚水の運搬）、若い男の先生の出征など、戦時色の濃いものでした。

女学校三年生の姉の話によると、女学校のすぐ近くの火薬工場での勤労奉仕は、本格的な工員としての仕事でした。その仕事の内容は、黒色粉末火薬の充填、包装、出荷の重労働で、一工程ごとに高い土手に囲まれた作業所でした。出入り口のトンネルを通過して運ばれてくる火薬を、十二・五キログラムずつ計って、木砕の中の紙袋に丁寧に詰め込み、ベルトコンベヤーに乗せて次のパラフィン工程に送り込み、そこで防湿処理をして二個ずつを箱詰めにしていたそうです。マスクをしていても真っ黒になり、パラフィンのため丈夫なエプロンもピカピカに光っていたそうです。

一度など、学校の前で海へ落とす機雷が落ちるのを見に行ったこともありましたが、

空襲警報が出る度に、社宅の外れの山のみもと

に作られた、横穴式の防空壕まで走って行きました。この防空壕は、壕内に電気まで引いてあって、頑丈そのものでした。

昭和二十年六月、当時工業学校の教頭をしていた父は、四十四歳で召集を受け、一旦は北方に向かつて行きましたが、南下する列車よりの人伝で、南の方へ向かった様子が家族のもとへ届いていました。

残された家族は、七十四歳の祖母、四十二歳の母、十八歳の長兄、十五歳の姉、十二歳の次兄、十歳の私と三歳の妹までの七人家族で、八月十五日を迎えました。

近くの知人宅で聞いた雑音混じりの放送ながら、私たちは戦争に負けたことを理解しました。姉は学校で重大放送を皆さんと聞きましたが、内容がよく分からずにただごとではないということを感じながら、家に帰ると「日本は戦争に負けて降伏したの！」と母と祖母が泣いていたのを見て、自分も体中の力が抜けたようにその場に座り込んで

しまったそうです。しかし夜になると、今まであれほど厳しかった灯火管制もなく、電灯の黒いカバーを外し、部屋の中を明るく照らしたときには、みんなが「ほっ」として嬉しくなったのを覚えています。

長兄は三月に咸興公立中学校を卒業して、日室塩野義製薬工場に勤務していたので、父が応召で留守になった後は何かと母を支えて、一家の柱となっていました。これから先日本人は、いずれ内地へ帰るとしても、父の行き先も分からず父の帰りを待つだけの家族は、不安な日々を過ごすこととなりました。

翌日からは、街を歩く朝鮮人労働者たちの「マンセイ！ マンセイ！」の聲が街中を圧倒し、朝鮮人による保安隊が結成されて、一応は治安の維持は図られていましたが、私たち日本人は「なんとしてでも内地へ帰らなければならない」という、当面の目標に向かって皆必死でした。帰国に備えて母は丸帯をほだき、ミシンで家族分の大きなり

ユックサックを作りました。大きな肩掛け鞆の底を二重にして、大事な書類をその中に隠したりもしました。ミシンは、その後朝鮮人の知人へ売り渡しました。

そのうちに、ソ連兵の進駐が始まりました。後からの情報では、先発隊は囚人によつて編成された部隊だったようでした。あちこちで、略奪や婦女暴行などの乱暴狼籍を、思うままにしています。日本人は家の戸締りを厳重にし、夜になると明かりを暗くして、息を潜めて生活をするようになりしました。

とうとう我が家へもソ連兵がやって来ました。夜に玄關の戸を革靴で蹴り上げて、有無を言わずに戸を開けさせて、マンドリン銃を抱えたソ連兵が押し入って来ました。「ウオツチ ダワイ！ ウオツチ ダワイ！」と、両親の時計だけでなく、父の衣類など手当たり次第に両手に持てるだけ持って、出て行きました。そのときまでに、姉は髪の毛を切つて頭を丸坊主にして、兄の服を着て男

の子に変身していました。

戦争末期から、我が家のそばの女学校に駐屯していた日本軍の人たちは、校庭で武装解除をされたのちに、集団でどこかへ連れて行かれました。

九月十五日の朝、日本人社宅の第一次の接收の通知がきました。午後三時までに社宅を出て、今まで朝鮮人が住んでいた社宅へ移るよう申し渡されました。社宅の人たちは大急ぎで移動準備にかかりましたが、その後すぐに二十四時間後の退去に命令が変更になり、徹夜での準備が始まりました。午後になると朝鮮の人が家財道具を持って来て、「今日からこの家は私たちが住みます」と言われ、その夜は二家族と一緒に雲城里の社宅で休みました。

翌朝、指定された朝鮮人の住んでいた住宅へ追い出されることとなりました。早朝から持てるだけの荷物を持ち、線路伝いに川向こうにある水里まで、アリの行列のようにして少しずつ荷物を運びました。祖母と妹が新しい社宅で荷物番をし

ました。

ようやく夕暮れ近く、列の最後尾になりながら、最後の荷物を持って水西里へ到着。とりあえず独身寮の一室に一夜の宿を取ることができました。

祖母の疲れがあまりにもひどいので、母が親切な朝鮮人の家を探して、その家の片隅に祖母と私は泊めてもらいました。妹が到着したときに「ここがおくに？」と聞いたので、皆が溜息をついたことを覚えています。独身寮では、やっと眠りに就こうとすると、南京虫の行列で体中が痒くなり、とうとう兄二人は毛布を持って、寮の外の砂地の上で一夜を明かしたことを覚えています。翌日に行われた住宅の割り当てで、入り口が南と北と交互になった温突二間に、土間の炊事場が付いた八軒長屋の西から二番目が我が家に割り当てられて、荷物を運び入れることができました。

母は以前、朝鮮人学校に勤めていたことがあるので、単語は少し理解できましたが、道中ですれ違う朝鮮人の大人たちに「イゴバラ（それみよ）」

と怒鳴られたそうです。追い出される途中で、高い丘の下を通っていると、朝鮮独立運動の戦士というたすきがけの姿でメガホンを持った人たちが、日本植民地時代の三十六年間の悪政を大声で批判し、「お前たちがこのような目に遭うのは当然の報いだ！」とわめきたてられました。今まで私たちは、全くそのようなことは分からずにいたので、ただ恐ろしさと情けなさに足取りも余計に重くなりました。六年生の兄は、悔し涙が出て仕方がなかった、と後に述懐していました。

翌年の春、三月末に咸興へ移動するまでの間の、長い苦しい生活が始まりました。夜のソ連兵の襲撃、バケツをたたいて住宅のみんなに知らせ合っていました。近所の工場の関係者などには、引張られてそのまま帰って来れなかった人や、拷問に遭って青あざだらけでも、帰って来れた人などいろいろでした。

私たち子供は、それでも寒くなるまでは近くの河川敷へ出掛けて、砂で広いお部屋を作って遊ん

だり、小川で風呂代わりに体を洗ったりもしました。

父の教え子の岩本さんのお宅へ、稲刈りの手伝いに行つて、白いご飯をたくさん食べさせてもらい、野菜などもたくさん頂きました。祖母と妹はそのお宅の結婚式にも招待されるなど、いろいろ親切に頂きました。

寒い冬がやってきました。八軒長屋で温突二間の住宅では、家の中の寒さはしのげましたが、外部との出入り口は紙障子、藁蓆を打ち付けて寒さを防ぎました。子供たちの家事手伝いは、暖かい間は少し離れた松林まで出掛けての焚き木拾い、共同井戸からの水汲みでしたが、冬は井戸の周りが凍り付いて、真ん中だけしか空いていない所からつるべで水を汲みました。また無煙炭の粉で団子を作り、天日で乾かして温突の燃料にする仕事もしました。寒いときに、一回だけ共同浴場での入浴の機会がありました。そのときはみんな生き返った心地がしました。

八軒長屋の北西にある共同便所は、北西の河川敷から吹き付ける寒風で、入り口のそばには雪がうず高く積もり、用を足したそばからそれが凍りつき高くなるので、それを割って取り出すのも住人たちの仕事でした。

だんだんと春が近くなつてくると、弱っている人から結核や発疹チフスなどが広がり、あちこちで死亡者が続きました。隣のお姉さんも、遠く離れた三角山の日本人共同墓地に葬られました。

食生活は、寒くなるころからはわずかながらも米などの配給があり、家族七人朝夕二回の雑炊に秋に母が丹念に干して作っていた干し大根や大根葉を入れて食べました。

母と長兄は生活のために、まず以前住んでいた家に出掛けて、いくらかの衣類などを返してもらつてきて、私たちに着せたり、それを売って生活費の足しにしたりしました。そのほかに、兄は日本人世話会の荷物の運搬や、なくなった人の遺体の埋葬作業などにも出掛けて、生活費の足しにし

ていました。

三月に入ったころ、父が昨秋に我が家宛に出した手紙二通が、続けて家族の元へ届けられました。父の無事と家族の事を気にかけてながら、先に内地へ帰って行くことが記されていて、家族一同涙して喜んだものでした。

手紙と一緒に言付けたという、なにがしかのお金は届いていませんでした。

「父からの手紙 昭和二十年九月二十六日記す
泉川御一同様へ新堂町 福田様内 克己

皆様定めし苦杯をなめて居ること御察し致します。母上はじめ宣子に至るまでそれぞれ異なつた心配で毎日を過ごしていることでしょう。多分すでに通知があつた事と思いますが、私は八月三十一日以来京城に居り福田、市岡その他の皆様の御厄介になり至極無事に過ごしています。当地に來て以来、加藤、新井その他の諸氏と興南へ帰ることを望んでいるのですが、全般の情勢は非常に悪く、未だ為すことなく当地にてぐずぐずしており

ます。(中略)日本の国も維新以来のあらゆる努力が水泡に帰しましたが、我が家もすっかり無一物になつた覚悟でいますから、いろいろな物品に執着を持たずに、身体だけは皆無事に脱出するようあらゆる努力を払って下さい。典雄は中学生姿になり、静江は男装(状況によつては)しても良いかと思ひます。あまり流言に惑わされないよう注意が必要です。とにかく品物は現地人にやつて、来てくれる人があれば、どんどん相談して何でも頼みなさい。もう一カ月苦しんで、誠に皆様気の毒ですが、まだまだこれから苦しまなければなりません。私はできれば興南へ行くべく努力しますが、これは今のところ不可能です。内地は食料その他いろいろな事情で、生活はなかなか困難ですが、ひとまず庵治へ帰らねばならぬだろうと思ひます。いろいろと当地で考えると頭が痛くなります。とにかく家族一緒になり、ともに苦しみ、ともに楽しみ、また笑いたいとそればかり思っています。いろいろ不運が重なり、母上にも気の毒

ですが、何事も運命とあきらめて元気を出して最後まで頑張つて下さい。皆揃つて笑える事のできる日を待ちましょう。

第二信 十月二十六日記す

随分皆さん苦しんでいることと思いますが、何とも仕方がありません。十日ほど前にお金を咸興の人に託しましたが、着いたでしょうか。今日北へ行った方より雲城里方面の様子を聞き、一同無事のように少し安心しました。

(中略) 私はいる事ができれば、いつまでもここで待ちたいのですが、復員軍人は内地へ帰らねばなりませんので、ひとまず先に庵治へ帰ります。誠に心苦しいのですが、悪しからずお許しください。

私は病気一つしないで至極無事に過ごしていませんから、その点は心配しないで下さい。

何卒病気をしないようお互いに注意して、元気でいてください。

母上様、栄子様、典雄殿、静江殿、博殿、

恭子殿、宣子殿 父より

みんなの中には、歩いて南へ向かう人や、船での脱出の話などが出ていたようですが、我が家では年老いた祖母や小さな妹がいるので歩ける状態ではなく、船のお金も工面できないので、咸興まで知人を頼つて母と兄が相談に行きました。その結果、とりあえず咸興まで移動することになり、最寄りの駅まで歩き列車で咸興へ出て、避難民収容所のお寺へ入りました。その後、南へ脱出して、空いていた街中の日本人の家に入りました。当初の予定では、咸興から脱出する仲間に入る予定でしたが、全体の脱出が阻止される事態が起きて、咸興に留まらざるを得なくなりました。

四月中ごろから九月十七日までの生活が始まりました。母は、元の女学校にできた「ソ連人の子供のための学校」の掃除婦として働きました。私も一度ついて行って手伝いました。次にソ連軍の将校宅へ、洗たく女として働きに行き、兄二人は同じく薪割りの仕事(ピリピリアラボーテ)を探

して働き、その報酬としてお米や黒パンをもらって来てくれました。母が洗たく女として働いていたとき、たまには妹もついて行ったりしました。

妹はあるソ連軍の将校夫妻に気に入られて、かわいがってもらっていましたが、そのうちに養女にほいと言われて、それから連れれて行くのを止めました。それでも将校夫妻は、妹に会いに来てくれました。姉も将校官舎へ子守に行き、私も八月には子守の仕事を見付けて働きに出ました。

留守番は祖母と妹でした。一日一食は外で食べられるようになったわけです。皆が働き出したので、少しはましな暮らしになりましたが、相変わらずこの街中でのソ連兵の襲撃があり、三軒くつついていた門の入り口には、大きなバケツをぶら下げて、人の出入りが分かるようにしたり、畳を上げて床下に隠れたり、裏の路地の抜け道へ逃げたりもしました。

偶然、近くに住んでいた母の教え子の朝鮮人の方にも、何かと親切にしてくださいました。日本

へ旅立つ前の日には、残していく布団などを引き取って食べ物と交換しましたが、貴重品だった飴玉なども差し入れて頂くなど、人の温かさが身にしみました。

日本人世話会の皆さんのお陰で、咸興在住の日本人の移動が可能となり、昭和二十一年九月十七日の早朝、咸興駅に集合して、北の呂湖へ向けての貨物列車で、集団引揚げが始まりました。脱出の費用は一人当たり千七百円でした。

闇船（帆船）に乗っての一週間、風待ちのためその後戻りや、大波をかぶりながらの南下、海岸へ近づいたときには、発砲された沖へ逃げ出すなど、いろいろなことがありましたが、やっと三十八度線のすぐ南の海岸へ降ろされました。まぶしいような砂浜を、注文津のテントまで歩きました。

大きなテント村で引揚船に乗るまでの共同生活が始まり、支給された缶詰の大きい豆に目を輝かせ、一日二食をちゃんと食べることができました。

十月一日、いよいよ私たちの乗る順番の船がやってきました。船首がパクッと開く「LSTQ〇五五号」という小型上陸用舟艇で運ばれて乗り込みました。

十月四日の出航の夜は、消え去りゆく朝鮮の山々に、皆今までの苦労を偲び、涙々の中に別れを惜しましました。途中、帰国を目前にして、船中で亡くなられた方の水葬がありました。どんなにか残念だったことでしょうかと、胸が痛みました。

引揚船は長崎県大村湾に到着して、緑いっぱいの山々を眺めて上陸を待ちましたが、上陸のための検疫で、伝染病患者が出て上陸ストップとなり、一週間ほど停泊しました。いよいよ上陸というときになって、佐世保の収容所がいっぱいなので、広島県の大竹収容所に向かうことになりました。関門海峡は機雷があるため鹿児島回りとなり、九州最南端の開聞岳を眺め、宇和海の島影ののどかな風景の中を通過して、松山沖へ停泊、翌日大竹港に上陸しました。

ここで頭の天辺から足の先まで、真っ白に降りかけられたDDTによる消毒と、向かい側の安芸の宮島へ飛んで行くコウモリの群れが印象に残っています。

大竹駅からの引揚列車に乗り、車窓から原爆で焼土となった広島を眺め、夜中に岡山駅で乗り換えのため下車、駅の地下道で宇野行きの特急列車を待ちました。宇野経由で明け方高松港到着、駅近くの引揚援護局の建物にて、父の出迎えを待ちました。

十月二十二日の朝、親戚の漁船で出迎えてくれた父と一年四カ月ぶりの再会、それこそ涙々の再会でした。船の上で、昨日父が釣ってきた「イイダコ」とさつま芋の朝食を頂きましたが、そのおもしろかったことは今でも忘れられません。

十一月一日から、私たちの小学校生活が再開されました。四国は暖かかったので、大竹の収容所で支給された半袖シャツ姿のままでの登校です。一年間以上の空白があるので、それぞれ一年下の

学年に編入されました。次兄は、はじめは学習内容が多いからと、二年遅れの五年生に編入となりましたが、後で六年に変更してもらいました。全く話の通じない方言の世界で、私はもう一人の引揚げの友人と、二人だけの会話の毎日が続きまして。今でこそ、当時の同窓会にも楽しく参加していますが、当時は朝鮮の学校が恋しくてたまりませんでした。

「学校を かわったときの 悲しさは、
生まれ故郷を 思う悲しさ」 恭子
が、そのころの私の心境です。

方言で話すと、姉たちには言葉が悪くなったと言われるし、それを使わないと友達には伝わらないし、いろいろと悩んだ時代です。

庵治へ着いたときには、祖母は栄養失調で足がむくむなど、かなり弱っていました。引き揚げて来た安心感と積もり積もった疲労とにより、祖母が床に着きましたが、庵治のおいしいお魚などを食べる毎日により二カ月ほどで元気になり、念願

の八人揃って元気でお正月を祝うことができた。

長兄は早速、定期船の船員に就職、父は翌年四月より新制中学校の教員となりました。姉は昭和二十三年四月から、高松にある県立職業補導所の洋裁科へ、船で通学しました。

家庭生活では、燃料に製材所の鋸くずをかますに入れて購入、オガクズ竈をこしらえて炊飯に使用しました。次兄が学校でオガクズ竈の作り方の研究発表をしましたが、それが庵治の町中で広まったことを覚えています。昔から何でも新しいものの好きだった両親が、朝鮮時代から重宝していた圧力釜を購入、いろいろな調理に活用しました。家は見晴らしの良い山の中腹に、祖父の冬の間の隠居所として建ててあったものなので、南側は全面ガラス戸で、日が当たるととても暖かでした。井戸は水が出なくて雨水の利用、足りない分はすべて山を下りて、少し離れた母屋まで汲みに行き、最後は六十二段の石段を担ぎ上げていました。水

やオガクズなどの大きな荷物の運搬は、私たち子供のかかっています。

祖父が昭和の始めに、高松の西にある植木の山地の鬼無から、苗木を担いで帰って山の斜面を利用して、植えてくれていた蜜柑、柿、無花果などの果樹が、私たちの食糧難時代の貴重な食べ物となりました。

八人家族では生活も大変だったので、次兄は兎を飼育して子を増やし、それを毛皮屋に売って生活の足しにしましたし、私たちは輸出用の麦わら帽子の材料編みや、日傘作りの内職に精を出しました。しばらくして、地元の農協で綿羊の飼育の幹旋があり、北海道より二頭購入して、みんなで草刈、芋づる運びなど力を合わせて飼育し、第一回の「毛刈り」の作品は、長兄の背広の生地になりました。

そのうちに姉が肺結核にかかり、昭和二十四年春には、結核療養所へ入所しました。土曜日の午後になると、船と電車を乗り継いだ後、五キロメ

ートル余りの道を歩いて、食べ物を届けたりしました。しかし、だんだんと弱ってきて回復をしないので、七月になって八百屋さんの軽トラックを頼んで、迎えに行つて帰宅させました。父が八方手を尽くして入手した新薬の結核治療薬ストレプトマイシン十本（当時一本千円）のお陰で、目に見えて回復し、年末にさらに追加のストマイを打つたことよつて、病気は全快しました。当時、肺結核は不治の病と言われていて、友達のお父さんや近所のお兄さんも、同じころに結核になつて亡くなっています。

昭和二十五年の春には次兄が中学卒業後、やはり引揚者で北海道へ入植した知人の所へ、仕事を求めて行く予定でしたが、北海道へ行く前にと受けた健康診断で、肺浸潤と診断され、北海道行きを断念して、兎を飼育しながら自宅での療養生活に入りました。当時、母が詠んだ歌に

「つぎつぎと 子等のいたつきしみじみと

とほしきたつき 思ひかえしぬ

あいかお まなこうるみて 熱あるを

さまでくるしと いはぬぞいとし」

というのがありました。

次兄にもストレプトマイシンが威力を發揮し、療養の甲斐があつて、二十六年春には県立職業輔導所建築科へ、約十キロメートルの道のりを自転車で通学できるほどに元気になり、入所しました。

昭和二十七年春、次兄は補導所を卒業したので、住み込みで働きながら工業高校の定時制へ、私は全日制高校へとそれぞれ進学しましたが、私は学区制の関係で船に乗っての通学でした。経済的には引揚げ後の病人続きなどで恵まれなかつたので、高校では奨学金、月謝免除などの諸制度を利用して学業を続けました。名門校へ入学はできたものの、田舎の中学校からの進学で、英語の文法力などは都会の友人とは雲泥の差で、通学の往復の船の中での友人との予習・復習、船の時間待ちの図書館での学習が続きました。九月には、次兄が仕事と学業を両立させるために転職したので、私と

二人で高松市内の長屋の三畳二間を借りての自炊生活が始まりました。私には、図書館での料理の本の学習も加わりました。母からもらう予算の範囲内でのやりくりやお弁当作りなども、工夫してできるようになりました。

母は羽仁もと子先生が創刊した雑誌「婦人の友」の戦前からの熱心な愛読者だったので、その友会の活動に参加したりして、生活改善のための創意工夫が大好きでした。友の会の生活展で表彰を受けたこともあり、またそのついで家事手伝いや、留守番の仕事も引き受けて働きました。婦人会の活動も盛んになり、肺ガン発病までは地域の婦人会長の仕事も引き受けて、村全体の生活改善、向上のために努力していました。

昭和二十九年春には、姉も体慣らしに小さな店の番の仕事を得て就職、三人での長屋生活となりました。そのうちに、姉も体力がついてきたので、洋裁の腕を生かして縫い子さんとして勤め始め、少しずつ生活も安定してきました。

昭和三十年の四月からは、学費のすべてを奨学金とアルバイトで賄うということで、私は地元の香川大学へ進学しました。高校時代の英語で苦勞した関係で、教育心理学を中心として学びました。

次兄は高校二年生のときに、実務経験があつたため、二級建築士の受験資格ができたので、早速試験を受けて免許を取得し、三年生の夏休みには一カ月仕事を休んで、我が家の土間の台所を床付きに改造し、母へのすばらしい贈り物となりました。三十一年三月、定時制高校を卒業、理解ある雇用主の支援を受けて、東京の日大建築科へ進学、昼間働いて夜間部へ通学したので、大学一年生在学中に一級建築士の受験資格ができて即時受験し、合格して皆で喜び合ったものでした。

同年齢では、大学専門課程で卒業の後、二年の実務経験を経て、一級の受験資格ができますので、高校進学の際にかなり回り道はしましたが、実務経験がものを言ったので、やっとその時には他の者に追いついたという思いがありました。

父は昭和二十八年、教育委員会制度の発足と同時に、中学校教員を退職、地元庵治村の教育長に就任し、昭和四十六年に七十歳で退職するまで十八年間、地域の教育行政一筋に歩んできました。

昭和三十二年秋、姉は縁あつて大阪へ嫁ぎ三人の子供を授かり、長兄もその後続けて結婚して近くに住み、二人の子供に恵まれました。

晩年の父の楽しみは、全国各地で開かれる元山中学校や女学校などの元山関係の会合へ参加し、その途中で埼玉や大阪の孫に会うことでした。

私たち兄弟姉妹は、それぞれの朝鮮時代の恩師の熱心な活動によって、同窓会が立ち上がり、現在も苦勞した時代を偲びながらの会合が続いています。

母は、昭和三十五年に祖母を見送った後、三十二年夏に肺ガンを発病、幸運にも母の友人の弟さんが、東京の慶応病院で外科部長をしていた関係で、結婚したての次兄を頼つて上京し手術を受け、片肺切除はしましたが完治しました。四年目にリ

ンパ腺に転移したガンが見つかり、新しくできた国立がんセンターで、同じ先生に診ていただきました。

病人続きでお金には縁のない生活でしたが、その間には結婚していた次兄と私の子供にも会い、合計七人の孫たちに囲まれての、残り一年余りの闘病生活となりました。私が夏休みの仕事の合間を縫って、何回も庵治まで通った八月末、「今度はお彼岸に来るからね」と話すと、「もう間に合わないかもね」と言っていて、昭和四十年九月一日の夜、永久の眠りにつきました。きっと自分の命を見詰めたが、生きていたのだと思います。

父は母を見送った三年後に再婚して妹を嫁がせ、その後生まれた孫四人、特に我が家には、私が仕事の関係で運動会に行けないときなど、松山まで応援に来てくれました。

私は結婚後、夫の仕事の関係で二年間上京、その間に学生時代に関心のあった障害児教育の勉強のために、一年間東京学芸大学へ通学しました。

午前中は、港区の中学校特殊学級の時間講師として働きながら、当時としては最先端の諸先生方の御指導で、数多くのことを学びました。以後松山へ帰って三十年、障害児教育に携わりました。退職後も教育相談の仕事にかかわり、今は若い教え子たちとの交流を続け、若い人たちの自立生活への支援をしながら、現在に至っています。

妹は高校時代の先輩に嫁いだ後、横浜での生活を経て、高松へ帰って夫の病院事務の仕事の傍ら、産業廃棄物の豊島問題や女性を議会へ送る運動に参加して、現在に至っています。私たちの世の中の片隅に追いやられがちな事柄に対しての思いは、戦後の厳しい生活の中で培われた賜物だと思っています。

今は成長した私たちの子供が、祖父の足跡を、関係する大学の図書館で見付け、曾祖父の若かりしころの記録を、役所の資料から探し出してくるなど、生活の営みは先祖からずっと続いているということを実感しています。

私たちの今の平和な暮らしは、六十余年前のあの悲惨な現実の生活の上に築かれたものです。あのときには、「もう戦争は絶対にしてはならない」と、みんなが心に誓っていたはずです。

今の平和を獲得するまでに、どれだけの命がアジア各地の野や山に失われていったことか、生きる糧さえもらえなかった、幼い命。

そのときにはこれが最高と教えられ、家族への切々たる思いを胸に秘めて、前途ある若い命が散っていった戦争の悲惨さ、いつまでも私たちは伝え続けていかなければならないと思っています。

警察官家族の運命

大分県 松尾 イサ子

一 新米教師の誕生

北朝鮮咸鏡南道の咸興公立高等女学校を、昭和十九（一九四四）年の三月に卒業した私は、四月に官立元山女子師範学校に入学し、翌年の三月に卒業する一年を国民学校の教師としての勉強をした。

卒業後は新米教師として、咸興より少し北の洪原邑の前津国民学校に赴任したが、ここは朝鮮人の国民学校であった。当時は後で考えると戦争末期であったが、そんなことは知らず子供たちは生き生きとしていて、軍歌を歌って登校して来た。どの子供もかわいらしく、私は教師になった喜びをかみしめていた。五、六月ごろになると、一段と戦争の激しいニュースが伝えられるようになってきたが、私たち教師は子供たちを励ましなが